特別連載　アジ研の50年と途上国研究

第1回　ジグザグの中国研究

小島麗逸（こじまれいいつ）

はしがき

小島麗逸氏は1934年，長野県下伊那郡下久堅村（現飯田市）に生まれた。1960年に一橋大学経済学部を卒業し，アジア経済研究所に入所している。1987年に同所を退所し，大東文化大学国際関係学部教授に就任。その後，同大学国際関係学部長および現代アジア研究所長を歴任し，2004年，同大学を退職した。また1989年から北京大学経済学部（現光華管理学院）大学院客員教授を経て，現在は大東文化大学名誉教授，北京外国語大学客員教授および農業者である。

氏は1960年代以降の日本の中国経済研究をリードした第一人者である。アジア経済研究所創設期に入所し，中心的な研究者として活躍しながら，1970年代以降，研究所の内外で多数の研究会を組織し，後進を育成した。本インタビューでは，戦後日本の中国研究者層の形成と，そのなかでアジア経済研究所が果たした役割を，氏の研究者としての個人的な成長過程に重ねあわせることで，回顧しようとした。インタビューは6時間におよんだが，紙幅の都合上，ここではその一部しか収録していない。日中国交樹立前後の岡崎嘉平太氏との交流，研究所内での厳しい競争等，興味深い内容をいくつか割愛した。そのひとつが，高度成長による地価高騰で都内に土地が買えず，一方，生来の農業生活への愛着から，1975年に通勤に片道3時間近くかかる山梨県大月の山村に一家で移住された話である。

本インタビューは，2009年8月20日，晩夏の蝉時雨のなか，そのご自宅で行われた。聞き取りは大原盛樹，佐藤幸人，清水実穂，松本はる香，木村公一朗（以上，アジア経済研究所。なお，大原は2010年4月から龍谷大学），嶋亜弥子（大東文化大学博士課程）が行い，編集はおもに大原が行った。

（龍谷大学経済学部・大原盛樹）

I　学生時代まで

――先生は1934年に長野県飯田市の山村でお生まれになります。まず「麗逸」さんというお名前の由来についてお教えください。

小島　小生は5人兄弟のまんなかなんです。一番上が姉，次いで兄貴，私と弟2人。村の坊さんがおやじの同級生で，上から3人まではそれ

に頼んだらしいんですよ。子供のころは画数が多くて劣等感をもってましたがね。でも今はいい名前を与えてくれたと思っています。

アジ研入試の面接の時，当時の東畑（精一）所長に「君は『美人が逃げてゆく』という名前だね」といわれた。小生は，「ちがう，間に『而』を入れると“handsome and great”と読めます」といいました。それがよくて合格したのかも知れない。

――かなり貧困と隣り合わせの山村のご出身ということですが，一方，お名前は非常に教養高い感じで，少々ギャップを感じます。

小島　いいことをいう。名は体を表していないと自分でも思っている。日本で漢字を使えたのは，貴族，武士，坊さんと庄屋階級だったんですよ。どこの山村にも寺はある。その人たちが日本の農村での漢字文化の担い手だったんじゃないかな。日本における仏教の普及にはすごいものがあります。

おやじは大変な教育熱心者だったんです。おやじ自身はかなりの素封家の生まれで，実家は明治から伊那谷で養蚕農家に繭の種を作って売っていた家でした。10人兄弟の次男でした。今でいう農業高校を受けて受かったんだけれど，親はやらしてくれなかったらしいです。「百姓の子供に学問が必要か」とひとこと。それで大変苦労したんやね。だから子供だけは，すべてを犠牲にして教育をさせたいというのがあってね。

――高校は飯田高校でしたね。

小島　昔の旧制でいうと飯田中学。南信地区では在村から向学心のある子供は，そこへ通いました。

吉田茂が *Encyclopedia Britannica* の1967年版（Book of the Year）に寄稿した“Japan's Decisive Century”という論文があります。それが『日本を決定した百年』(注1)という単行本になっていますが，あれはいい本です。そのなかにこういう記述があるの。今の言葉でいうと，人的資本ですね。日本の指導者は幕末以前も，それ以降も教育を大変熱心にやってきた。日本を決定した一番大きな要素は人的資本だというんですよ。私が非常に興味をもったのは，尋常小学校6年の上に，高等小学校が2年あったでしょう。これは義務じゃなかったんです。それを1年延ばして3年にして，9年間を義務教育にするとマッカーサーが指示した。文部大臣は「どんなに計算しても，校舎と教員が足りません」といったんだけど，GHQは聞いてくれない。それで，どうしたかといったらね，村々でたとえばお宮があるとそこから大木を切って校舎を建てて教室を作った。そういうことが書いてあるの。おれの田舎には古墳があったんです。前方後円墳で木がうっそうとしていた。それを切り倒して校舎を建てた。みんな手弁当ですよ。吉田茂は「日本の地主は搾取ばっかりしとったんじゃない」というんだ。やっぱり一番費用がかかるのは学校，つまり土地と校舎。地主はあんまり労働には出ないけれども，「おれの山，あそこに木があるから，3本も切ってこい」と。そして校舎の建設は村人が無償労働でやったのです。

そういうのをみるとね，のちに私が中国の農村をみている時に，人民公社でも，ああ，同じことをやっているな，これは立派なことをやっ

ていると思いましたけれどね。

――高校卒業後，一橋大学経済学部に進学されます。どうして一橋大学に行かれようとしたんですか。

小島　それは兄貴の薦めです。おれ，全然一橋大学のこと知らなかったんですよ。今のような情報社会じゃないでしょう。

兄貴は高校を出ただけで，でっち小僧的に衆議院事務局に入ったんです。おやじが大学はだめだ，そんな金も時間もないというので。その兄貴が東京からおやじに手紙をくれるわけ。「麗逸以下の弟は，何とか大学にやってくれ」と。そこでおやじは「金はやれん。時間だけ与える」ということで，受験を許してくれた。衆議院の事務局にいたから世のなかの雰囲気がわかっていたんだと思う。

その受験の直前に病気が発覚するんです。慢性腎臓炎。当時は飯田線と中央線で新宿まで9時間か10時間かかった。その時，初めて郡から外へ出た。戦時中は小学校の修学旅行がない時でね。旅行などできないほど村は貧しかったから。

――一橋大学に入る前の段階で，中国に対する興味はおもちになられていたのですか。

小島　全然関心なかったんです。ただね，合格した後，面接があり，そこで第2外国語を選ばにゃいかんわけ。クラスの編成のためにね。

それで兄貴がね，「おい，おまえ，中国語やっとけよ」と。「どうして？」と聞いたら「あれ，でかくなるぜ」と。それから姉の旦那ね，これは中部電力で組合運動をやっていて少し左がかっていたんだろうね。「中国語やっとけ」と。それでしょうがないから中国語に丸をつけて出した。

――入学直後に長期休学されますね。

小島　それからずっと病気で4年間，飯田にいたわけだ。金がないんだもの。ちょっとは入院したことがありますがね，ほとんど自宅療養ですよ。同期入学生がみんな卒業したのちにおれは復学したわけやな。だから大学を卒業したのが26歳です。

――休学中はどう過ごされたのですか。

小島　何をしてたんだろうね。今，左目はほとんど失明に近いんですが，それは多分そのときに，こうやって伏せながら本を読んでたっていうのが原因のひとつでしょうね。だけれど，病気の経験がおれには，今思うとものすごくプラスになっている。

人間の体について考えはじめるわけやな。腎臓病は塩分をとっちゃいけないということになってるんだ。だから大根でもニンジンでも水だけで煮たのを，おふくろがくれたんやな。そうするとね，野菜の味ってあるんだということがわかるわけだ。

病気という何か恐怖感があるからな。「おごれる者は久しからず」とか，「親骨折って子楽して孫の代にはこじきする」とかいうでしょ。おじいさんはすごく努力して一家を，国をつくり上げる。二代目はその恩恵で楽になるけど三代目になるとその資産を食いつぶして滅びていく。明治を一代目とすれば今の日本は三代目に

入る。そういう栄枯盛衰というのはたぶん，4年間，腎臓で寝ていなかったら体得できなかったんじゃないかな。肉体の盛衰を社会の盛衰に適用してみるの。のちに毛沢東を読んだときにね，社会を体に擬して考えてるわけやな。宇宙の循環などというのが出てくるんです。そういうことが理解できるようになったね。

――1956年に大学に復学されてからはどのような勉強をされたのでしょうか。

小島　中国語をやりましたね。まさに就職できるかできないか，いつも心配があるわけですよ。当時は会社受験時の年齢制限がだいたい24歳だったけど，おれは26歳でしか卒業できない。普通の道は歩けないなと。そうすると自分で競争できる何かがなければ困るじゃん。それで中国語を一生懸命やった。目標は外語大の中国語学科の学生に負けないレベルになること。三省堂のちっちゃなポケット辞書しかなかったけど，あれがぼろぼろになったからね。

――大学の4年間で読まれた本とか，あるいは何か影響された思想とかありましたか。

小島　ないね。おれは勉強しに大学行ってないから。復学した年におやじが亡くなってね。自分の生命を維持するためにアルバイトばっかり。少し小遣いを稼ぐなんていうのじゃない。しかも4年生の時おふくろが大吐血してさ，子供たちが稼いで医療費を送らざるをえなくなった。一番働いた4年のときは1週間に9回家庭教師をやってた。

――そうはいっても一橋大学ですので，何も勉強されなかったわけではないと思うんですが。何か中国なり，経済に関して…。

小島　のちに学長になられた種瀬茂という先生のゼミにいてね，5人くらい学生がおりましたけれども，そこで『資本論』の第3巻の一部の，生産財部門と消費財部門の2部門間の経済循環を読みました。今，印象にあるのはそれだけですね。ようするにケネーとかの「経済表」，現在のインプット・アウトプット・テーブルですな。そういう経済循環のようなものを少しは勉強していました。それでのちにアジ研に入ってから，石川（滋）先生が主査をされていた研究会にあまり抵抗なく入っていけたんじゃないかと思うけれど，その程度ですよ。

石川先生については一橋大学では全然知らなかった。あの先生は経済研究所の教授で，大学院の授業しかもってないんです。卒論で何を書こうかっていうときに，種瀬先生が「おまえ，中国語をやっているんだから中国経済か何か書いたらどうよ」っていうから，「じゃ，何をどう勉強したらいいんですか」と聞いたら，「おれはわからんが，研究所にこういう先生がいるから行ってみな」って。それで先生を訪ねて行ったら「アドラーっていう人の『中国の経済』っていう本(注2)が日本語で初めて翻訳されて，日本語で読めるのはこの程度しかないから，それを取っ掛かりにして何か書きなさい。学部の卒論でしょう？」って。それで何を書いたか，今，全然覚えてないね（笑）。

――村松祐次先生は？

小島　村松祐次さんはね，当時は優雅な時代でね，大学から派遣されて海外へ行くっていうのが2年ぐらいあるんですな。奥さんも連れていかれたんですけど，後半の1年間，その家の留守番をする学生が欲しいっていうわけよ。中国語の熊野正平先生のところへ村松先生からね，「熊野さん，あんたのゼミの学生2人，おれの家に住ませてよ。1人5000円出すからな」って。楽だったよ，当時の金で5000円。それがどこに家があるかと思ったらさ，西八王子から歩いて25分くらいの，ずーっと峠の上のほうにあるんだよ（笑）。ぽつんと。

――そこで村松先生から何か薫陶を受けたとか？

小島　いやいや，そうじゃなくて，村松先生は海外でしょ。学生2人だけおりゃ，あんた，遊びほうけている（笑）。アルバイトが主体という，それだけの話です。先生の仕事について私はあまり勉強してないんです。そういう本があると若干はめくってみた程度でね。彼は酒を浴びるほど飲む先生だったね。

――当時は中国が独立して大躍進もはじまろうとしていた時期ですけれど，何かそういう中国の情報は意識されていましたか？

小島　いや，あれは読んだですね。4年生の時だったか，スメドレーの『偉大なる道』(注3)，朱徳伝ですね。それからエドガー・スノウの『中国の赤い星』(注4)。これはやっぱり感銘を受けたね。

――そしてアジア経済研究所に就職されます。

小島　就職活動の時はね，ほとんどの会社の年齢制限が24歳でしょう。ふいっとみてたら28歳までOKというところがあったんだよ。それがアジア経済研究所。今のように案内のパンフレットもあらせんよ。じゃ，おれ，ここ受けようと。

――アジ研がいいと思ったのは，やっぱり研究ができるだろうと。

小島　いや，研究じゃない。28歳まではOKという条件ね（笑）。それからもうひとつは，たぶん，営業とかは体がもたんだろうと思った。研究職はそんなに頑丈でなくてもいいというイメージがあったんだな。実際はそうじゃないけれどね。研究者は，ほんとうに最後の詰めをと思ったら体力が要るけどね。でもその当時はそう思って試験を受けたの。

II　アジ研入所

小島　その年，ずいぶんたくさん応募が来たんですよ。アジ研は1958年末が開所で，翌年が実質的な1年目です(注5)。そのときはあまり公開せずに職員を募集して採ったんだよね。それが1期生です。私が受験したのは翌年1960年4月から入所する第2期で，競争率は50倍くらいになったんじゃないかな。

だけれども小生に幸運だったのは，面接をする部長以上が一橋大学をあんまり知らなかったんだろうね。一橋大学は経済学が強いらしいということくらいしか理解がないわけよ。「何を

やったか？」と聞かれて「中国語をやりました」って中国語を前面に出した。ずいぶんたくさん採ったですよ，あのときにね。創成期ですから事務も含めて24～25名採ったんじゃないかな。研究職だけでも10人くらい。

全部試験の結果で入る。10年も20年も満鉄調査部や他の研究所で中国調査をしていた人ね。朝鮮総督府や台湾総督府で調査員やっていたような人。そういう人は一切入れないの。復員は入れない。そういう人を入れたら新しい研究所は作れないと。これは当時の所長の東畑先生の大変明確な方針ですわ。

――それは研究の方法論から来るんでしょうか。それとも過去のしがらみでしょうか。

小島　やっぱりしがらみですね。ああいうものを作ると代議士を中心にいろいろな採用要請がくるらしい。実際そういうのがずいぶんあって，先生は全部お断りしていたらしいです。それは私が何回も先生から聞いているのね。

――そういう方針があったにもかかわらず，いまだにアジ研は満鉄調査部の流れの上にあるという言い方がよくされています。

小島　あれは観念左翼の人たちがつけたレッテルですね。日本が再びアジアを侵略するシンクタンクだという言い方はありました。

――アジ研に入った時点で将来担当する地域が分かれていたんでしょうか。

小島　ええ，分かれていました。東アジア，東南アジア，ラ米，中東はありました。アフリカは全然ないですね。東アジアには台湾がないんです。なぜないかといったら，台湾のことをやるのは反共主義者だ，親中国ではないというような感じだった。これは当時のアジ研の幹部よりも，受験者のほうにそういう気持ちが多かった。

台湾研究では戴國煇さん（1976年に立教大学に移る。2001年没）がおりましたけど，この人だけは別だ。これはさきほどいった東畑先生が全員試験で入所させるという原則を破った人事なんです。戴國煇って人は大物でね。東大農学部で台湾の甘蔗糖産業の研究でドクターを取った人で，東大在校中から非常に有名だったんですね。それを先生は，アジ研の採用決定会議でたぶん反対されるだろうと考えた。台湾出身者だと，台湾と日本がいよいよ結びついて中国に敵対する関係になると，こういう人が必ず出てくると。だから厳しかったですよ，台湾をちょっと触ろうとしますと。

――小島先生は大学時代に中国語以外は特に勉強されなかったとのことですが，当時入所した人たちというのは，同じようなタイプの方たちだったのですか。

小島　いや，そうじゃない。みんなやっぱり勉強しとったな。だから当時の私は劣等感の固まりやったね。

Ⅲ　海外派遣で香港へ

――アジ研に入所されて，2年目（1961年）に海外派遣に行かれたんですね。

小島　そうです。同期生で一番早かったです。

――海外派遣に行かれる前の１年間は，何をされていたんですか。

小島　何もしてないです。中国語は習っていましたよ。

海外派遣先は香港大学です。ここはおもしろかったですよ。香港大学に正規の学部以外に付設の語学研修所があってそこに行っていました。ここに各国の外交官になる卵が来ていたんです。当時，中国と国交のない国が大部分ですから，彼らは香港へ入り込んで勉強していた。

香港でおもしろかったのはドワイト・パーキンス（Dwight Perkins）(注6) と一緒になったことです。これは今でも家族ぐるみのお付き合いをしています。パーキンスはスタンフォードの博士論文を書くために来ていました。当時アメリカは金持ちだったから，博士過程の学生を現地国へ派遣するわけやな。中国へ入れないから香港に。それで１週間に１回ずつ交流会をやろうと。うちの母ちゃんと一緒にな。それで，おれとパーキンスは中国経済をいろいろ議論するわけや，２～３時間。それからうちの家内と向こうの母ちゃんは，うちの家内が中国語を教えてね，向こうの母ちゃんが英語を教えるということをやっとった。当時，1961～1962 年ですから，キューバ問題があったり，チベット問題，中国とインドの国境紛争とかあった時期です。向こうはいつも中国は侵略者だというわけだ。おれはそんなことはねえと，いつもやり合うわけ。そうしたら途中で，奥さんがジュリーというんだけど，「おい，ジュリー，ナイフ隠しとけよ。小島が興奮してきた」とかいっていたね。そういうのを１年続けたけど，あれは非常におもしろかったね。彼とおれの見方の相違ね。そのときは，これは理論はかなわん，もうちょっと勉強しとかなきゃいかんと思ったですね。

――理論というのは経済学ですか。

小島　経済学。たとえばラーナー（Abba P. Lerner）とか，ポーランドのオスカー・ランゲ（Oscar Lange）とか，彼はさかんにいろいろな学説を出してきた。おれが名前も知らないようなのをいつも出してくるのです。そういうものを基礎にドクター論文を書いて送ってきましたね。それで「ああ，理論ってやっぱり勉強しとかにゃいかんな」ということを痛感したですね。ええ。

1960 年 4 月に入所した研究員が 10 人くらいいたけど，経済学部を出たのは 2 人だけしかいないんですよ。伊藤正二（インドの財閥等を研究。1993 年横浜市立大学に移る。1997 年没）と小生だけ。その 2 人だけ選んで先に海外に行かせたんだな。アジア経済研究所って「経済」がくっついているから（笑）。

――海外派遣中の研究テーマですが，アジ研の記録によれば，香港に行かれる前の研究計画は開発資金の調達だったようですが，行かれてから国民所得計算について論文を書かれています。

小島　混乱してましたね。あの頃のわたしは何かに没入してやるってのはないんですよ。人が隣で他の国のことを何かわあわあやっている。それが気になっておれもちょっとやってみる。その程度の話やな。

東畑先生は入所当初の研究者の養成方針として「昔の西洋経済史をやっている人たちは西洋に一度も行かずに西洋経済史の本を書く。それはありえないことだ。アジア経済研究所の職員はそうであってはならない」といつもいっておられたね。肌で感じよ，と。そうやってみると，中国人の現実のビヘイビアが想像していたものとまったく違うわけですよ。平気で人をだますし，悪いことをするしね。中国語の「討価還価」（値段の駆け引き）ね。日本では値段の駆け引きをあまりしないでしょう。香港なんか，もうてっぺんからそうだからね。「要らんわ」といって入り口を出たり入ったり3回か4回やっているうちに半値くらいになるでしょう。それはびっくりする。それがあたりまえの社会なのね。

それから，床屋へ行ったら岡村寧次の話になってね。岡村寧次っていうのは，最後の日本の支那派遣軍の司令官や。ようするに普通なら戦犯で首切られる人や。おれのおじいさんか何かが，日本軍にやられた。「岡村寧次ってやつはしゃあない」って。ここ（首筋）を剃ってもらっているときに，その話をするんだな（笑）。あれはやっぱりショックだったね。

思想的にはね，10月1日に五星紅旗(注7)が立つ所は，セントラルの官庁街だけなんですよ。これは中共当局が派遣した機関です。ところが貧しい所はみんな10月10日に青天白日旗(注8)が立つんだよ。特に青天白日旗は「蛋民」が多かった。つまり水上生活者ね。木っ端舟に乗って，すごいんや。青天白日旗が。中国共産党は貧民の味方だなんていうが，こりゃ違うじゃないって思うわけ。当時はまず観念的に考えていたから。そういうのをいくつも香港で体験しました。その収穫のほうが多いね。東畑先生のいうようにやはり百聞は一見にしかず，みとかにゃあかんでということがたくさんあった。

――派遣前に抱いておられた中国のイメージが，かなり揺らいできたのですか？

小島　揺らいでくるんです。今思うとね，あのときはもう3000万人，4000万人が餓死している直後ですよね。だから香港にいる人はそれをかなり知っているわけです。こちらは頭のなかで中共のやることはみんないいと思っている。彼らに「中共が間違うはずはない」っていうことをいったら，「あんたは外国の人だからね」とひとこといわれた。「生活者は違うんですよ」っていわれたことがあります。

こちらは非常に観念的にスメドレーやスノウのイメージを描いていたからね。別にスメドレーやスノウがうそを書いているんじゃない。あれもあの当時の真実だと思うよ。けれど，そこから受け取って自分が観念的に考えたイメージはやっぱり崩れていくんだよね。

Ⅳ　石川滋先生と長期展望プロジェクト

――1963年に香港から帰国されます。当時入られた「中国経済の長期展望プロジェクト」(注9)についてお伺いしたいと思います。

小島　香港から帰ってきて，私にとってひとつの転機が訪れることになった。当時，アジ研ではeminentな先生を3人くらい招聘していて，石川滋先生もそのうちの1人だった。石川先生が主査をされていたのが「長期展望プロジェク

ト」。あれは4～5年かかったね。でも先生は「おまえは入れない」っていうんだ。「おまえは海外に2年もいて何も書いてないだろう。何ができるんだ」ってね。

アジ研は困っちゃったわけ。当時の調査研究部長の笹本さん（武治。1970～1976年理事。のちに城西大学に移る）がたぶん頼み込んだんだろうな。「そういうことはアジ研の制度じゃできませんから，養成する意味で入れてください」って。そうしたら石川先生，何といわれたと思う？「お茶くみと研究会の準備だけしとれ」。あれは厳しかったよな。

石川先生の最盛期ですよ。石川先生の『中国における資本蓄積機構』(注10)，あれは日経出版賞をもらいましたが，今読んでもいい本ですね。あれを書き上げた直後ですから，一番油の乗り切っている時やな。長期展望プロジェクトに入って何カ月かたって，「おまえ，化学工業をやりたまえ」といわれた。バケ学工業の「ば」の字も知らないわけや。資料は『人民日報』と『紅旗』以外は何にもない。それで何かでっち上げないかん。

それで一応書き上げて，石川主査に提出したわけよ。おれのとこへ「来い」っていうから行ったらね，原稿をボーンと放り出して，「今からでも遅くない。職業を変えなさい」と，ひとことだけいわれた。付箋を1ページに3つか4つ張っとったな。もちろんすでに結婚しているよな。香港に行く直前に出征兵士のような形で何回か見合いして，最後に選んだ今の母ちゃんと。いやあ，それはショックだったね，あれは。

それで村松先生のとこへ行ったわけ。「ちょっと先生，相談があります」って。そうしたら村松先生は「おーい華子，早く酒もってこい」といって。華子ってのは有名な済南領事館の西公使っていう方のお嬢さんで，先生の奥さん。「いや，実は石川先生にこういわれました」と頭を抱えていうと，「おーい華子，酒もってこい」と。「おまえ，飲めや」。あとはばか話ばっか。これはだめだって思った（笑）。それで「ごちそうになりました」といって，玄関で靴を履いていたらね，「人の小言は金を払ってもいってもらうもんだよ」とひとことだけおっしゃった。おれ，それはそのときはわからなかったけど，帰りに西八王子の駅へとぼとぼ歩いている途中で気がついたんだ。ああ，なるほど。石川先生はおれをかわいくて，励ますためにいわれたんだって，初めて気がついた。あれは31歳か32歳だよな。

――ここが良くないとか，こう変えたらいいとか，そういう指導ではないんですね。

小島　ボーンと原稿を放り出して「職業を変えなさい」。これだけなんだ。それは昔の人は厳しかったよね。そこでその弟子を測っているんだろうね，たぶん。それでくじければここまでよと。しかしその背後にはね，やっぱり大変な愛情があって，何とか育てたいという気持ちがあったんだね。今の若い人はそれやったらつぶれちゃうね（笑）。褒めるしかないです。1のことを5くらいに褒めるしかない（笑）。

――1960年代の小島先生は，アジ研の研究会としては石川先生の長期展望研究会のみに所属されています。「職業を変えろ」といわれて，石川先生以外の研究会で研究をされるというこ

ともお考えにならなかったのでしょうか。

小島　石川先生のモデルは，基本的にマハラノビス・モデルなんです。さきほど紹介した「資本蓄積機構」というのは，インドのマハラノビス（Prasanta C. Mahalanobis）が第2次5カ年計画を作るために作成したモデルを，ハロッド＝ドーマーの動学モデルと合体させて，1950年代の中国経済をそのモデルで解釈しようとしたものです。これがものすごくしっかりしてるわけ。だからおれのように理論に弱くて，数学のできんやつが，そんなの改良も何もできないじゃん。だから，そのなかの一部分を研究する。その一部分が，たとえば化学工業だったり鉄鋼業だったり。工作機械工業もやったよね。

「君，鉄鋼業をやりたまえ」と，石川先生のほうから指示が来るわけです。それで一生懸命もがいたわけ。当時は，資料は基本的にゼロですね。工作機械に関係する統計なんて，そんなものはないんですよ。1950年代の資料では，雑誌としては現在の国家発展改革委員会，前の国家計画委員会が出していた『計画経済』というのが一番よかったですね。あとは『新華月報』。これらはみんな政府の担当者の報告です。そのなかに，10論文読んでたまにひとつか2つちょっとした記事があるわけです。「昨年よりも5パーセント増大した」とか。そういうものを拾っていくわけです。200拾って，ひとつか2つ利用できるかどうかね。

たとえば化学工業の主要製品はゴムでしょう。どうやってゴムの生産量を推計したらいいか。当時の統計部に通産（通商産業省。現在の経済産業省）から来た大泉さん（悦郎。1973～1977年理事。その後，名古屋商科大学へ）というおもしろい部長がいてね。「困っちゃったよ，おれ。なかなかできずにいる」といったら，「中国は人口多いしな。産児制限やってんだろ。雲母だよ，雲母」。男性用サックを作るために雲母を入れるんだってね。それで雲母から推計するとサックの生産量が出てくるっていうんだ。「うーん」って唸っちゃった。そういうことを平気でいう部長がいたの（笑）。

しかしそれは小生にとって非常に啓示的だった。自動車がまだ普及してない，航空機もあんまりない，そういう国のゴムの需要量というのはどのくらいかっていうのは，他の1人当たり所得が500ドルくらいの国の資料を調べれば，推計できるじゃないかって考えついたんだ。日本だってそういう時代があったし，インドは経済水準が似ていて統計が比較的多いから，それと比べれば推計できるじゃないかと。

そのために日本の1920年代を調べたわけです。当時はまだ車社会じゃないけど，軍備は非常に多くて中国に似ているだろうとかね。鉄の消費量を比較してみる。当時は鉄の生産が100のときに，ゴムの消費量が1くらい。鉄のほうは比較的資料がまだあるんです。中国は1957年までは統計を発表していましたから，それを基本にして1965年とか1967年はこのくらいだろうと，ある程度わかってくるわけです。

だからね，ほとんど資料がないところで中国の経済研究をやるというのはね，一種の想像の世界なんです。しかし数字で扱わないかぎり意味はわかりません。それでなんとか数字を推計する。石川研究会ではそういう訓練をしたよな。

――先生はそのとき化学なり鉄鋼なりの個別産業の研究をされましたが，将来的に何か全体像

を考えたくて，そのうちのひとつのパーツとしてやると考えられていたのでしょうか。

小島　そこまでいかない。石川先生がこれをやれっていうからね。「わかりました」といってやるだけの話です。先生は加々美（光行。1991年愛知大学に移る）にも矢吹（晋。1976年横浜市立大学に移る）にも田近（一浩。故人）にも，みんなそういうことを指示していたんですね。ところが，加々美なんていうのは一番いいかげんで（笑），作数が多いの。数を作っちゃう（笑）。矢吹は「こんな研究会，おれるか」って出て行っちゃったよ。おれは従順だからさ，忠実にそれをやった。

何も知らなかったから，そこから何かね，どうやったら描けるかっていうのをいつも考えるチャンスは与えられたと思うね。そういう意味では非常によかったと思う。

――石川研究会でのお仕事と並行しながら，小島先生は農業，人民公社，農村工業化，農機具産業とかについて，同時並行的に『アジア経済』で発表されています。それらは石川先生の論調とは違いがあるようにみえます。

小島　私は石川先生にモデルとかマクロ経済でずいぶんと影響を受けておりますが，先生は，私のいう「労働蓄積」というものを入れていなかったわけですね。貧乏なときにはただで働かせて，国を作っていくというね。これは日本でもずっとやってきたわけです。無償労働で固定資産を作り上げるっていうことです。

中国のように孤立した社会で，外国資本の援助がないところで，かなりの重工業を建設します。その背後には軍事，兵器の生産がありますが，そちらに資源を取られた国で農村をどうやって開発するか。そうするとね，てめえたちで働くしかないんです。堤防を築いたり，小さな田んぼを開墾して大きくしてとかね。

（今住んでいる）ここら辺(注11)ではみんなやっていたわけです。50年とか60年前，今のおじいさんたちに聞くと，みんなやっていた。私の子供のころと同じことですね。小学校のころから動員されたんだから，われわれは。村に村有林があるでしょう。植林するとね，数年間は毎年下草刈りをせにゃいけないんです。つるが絡んじゃうから。そんなの金を出して日当払ってやっていたら成り立たないですね。それがさきほど，吉田茂の日本が教育をどうしてきたかというくだりでいった無償労働なんだ。そういうのが経済的に成り立つかどうか，マクロで計算するっていったって，１日賃金何ぼでやってたら成り立たないなんて，個人的体験でわかるわけです。だから毛沢東は，そういうボトルネックを乗り越えるのに，人民公社で強制的に労働力を動員したわけですね。だから，おれは一時期，あれは成功すると思ったな。ただちょっと行きすぎて3000万人，4000万人の餓死者を出すという時代になるわけですけれど。

そういう面は石川先生にないんです。だから，おれが最初に出した本(注12)のなかに，石川先生はこの点については「視野狭窄症」だっておれは書いた（笑）。ああいう言葉，使ったらいかんね，恩師に対してね。おれちょっと軽率な面があるからさ。

V　現代中国に対する認識の変化

――ところで，さきほど1963年までの2年間の香港での現地体験で，スメドレーやエドガー・スノウ的な中国に対するイメージが崩れてきたというお話をされました。

小島　そう。ただ，全面的にはまだ崩れなかったわね。全面的に崩れたのは，ちょっと時間が経ってからだったかな。1963年のことが1973年にやっとわかってね，「ああ，政治運動っていうのは厳しいもんだな」ということを感じたんだ。

――どういう経過で全面的に崩れたのでしょうか。

小島　私に非常に影響を与えた人として東畑先生や石川先生のことを話しましたが，他に一橋の中国語の先生でキン（靳）先生というのがおられたんですよ。熊野先生といつも一緒に一橋の中国語の第2外国語の教壇に立っておられたんです。この人がキューバ事件の直後の1963年の秋にひょこっと香港の私の下宿へ来た。「先生，どうしていらしたんですか」と聞いたら，「いや，これからマカオに行くんだ」という。天津に住んでいる奥さんがマカオに来るっていうから，会いに行くんだよと。それで行かれて，1カ月ぐらい経って彼がマカオから帰ってきた。そこで「先生，どうでした？」と聞いたんだ。おれはまた夫婦が何年も離れているからさ，「夜，大丈夫でしたか」っていう意味で聞いたんだ。そうしたら「だめだった」っていうんだよ（笑）。何がだめだったって聞いたらね，「金の延べ棒」を持ち出せなかったって。

天津からマカオへゆく旅に長女がついてきちゃった。長女は新世代だっていうんだ。縁の下から金の延べ棒を持ち出して，日本にいるだんなに渡したなんていうことを暴露されたら大変なことになる。ようするに密告が怖いということです。中国共産党は1950年代前半とか文化大革命期とかで，息子や娘が親を密告するという時期がありましたから。うーん，それが現実かと思ったね。なるほど，革命は複雑なんだと思った。

そのキン先生は，東京におられるときは「中国革命はこうや」って，それこそエドガー・スノウやスメドレーが書いたようなきれいなことをいうわけよ。共産党は清潔だと。本人は中国から排除された人なんですけどね。1951年，1952年の三反五反運動(注13)のときに。それは敗戦前に東亜同文書院(注14)で教えていた人だからなんだけど。

それが，のちにこういうことだとわかったんだ。いいか。

おれが中国へ初めて行ったのは1973年の3月や。北京に2週間，あと2週間は西安，延安，上海を回って帰ってきた。当時一緒に行った日本側代表団は11，12名いたんだけど，1台の乗用車に2人ずつ乗って6台の車で動くわけや。中国側で全行程を一緒に回ったのは唐家旋，後の外務大臣ね。あした日曜日でみんなで万里の長城へ行きましょうという日があった。その日，我々の車の前の席にいつもと違う人が乗っていたんだ。「小島さん，あした万里の長城へ行かずに残っていただけませんか。私から団長に話しときます」，という。

――運転手さんが？

小島　いや，車に入り込んだ新しい人が。「どういうことですか」っていったら，「この人をご存じでしょう」って，キン先生の名前をいいはじめた。「キン先生の奥さんが小島さんにお会いしたいといって来ておられる」と。さんざん世話になった人だ。北京飯店にあしたの午後1時に何号室に来てくださいとくるので，「わかりました」と。おれは心を躍らせて行ったわけよ。奥さんの他に男の人と女の人がいた。

そうしたらね，「私がキンの家内です」といって写真をみせてくれた。北京の北海公園で一家揃って写ってるわけ。「いつの写真ですか」っていったらね，この前，キンが1963年に中国へ帰った時っていう。「えっ？」って。おれにはマカオへ金の延べ棒をとりに行くっていってたのに，あら，実際には北京に帰っとった。

おれの頭の輪転機を回してみるとね，ド・ゴールが中国を承認(注15)する直前で，日本政府も揺れたことがあったんだよ。あれはまだ池田内閣だよ。官房長官だった大平（正芳）さんの国会答弁がグーッと揺れるんです。中国には厳しいことをいわないんだ。それに関する情報収集だったんだね。キン先生はそれで召還されたんだ。

キン先生は日本に来られてから外務省の中国要員の中国語の講師をやっとった。たまに日曜の朝に彼の家に行くでしょう。そうしたら「小島さん，今日はだめよ。昨晩，外務省の人が来ていて徹マンやっていたから，今日はだめよ」と女中がいって，何回か追い返されたことがあるの。中国語を習いに行くとかの時にね。それは，みんな中共のコントロール下でやっていたんだね。日本政府がどう動くかね。そういう人は何人もいると思うんだ。一種のスパイですね。

おれはそれを聞いて愕然としていたんだ。しかもこの話には，プラスアルファがあるんだよ。その夜にね，北京に「東来順」という店があるわね。

――羊肉のしゃぶしゃぶで有名な。

小島　そこでごちそうしたいというのね。その奥さんと一緒にいた男の人と女の人がね。奥さんは「小島さんが中国へ初めて来られたと『人民日報』で知りました」というの。でも『人民日報』になんか載りっこないんだ。載ったって，あの当時，そんなおばあちゃんが『人民日報』なんか読むわけないんだよね。実際にはみんな調べておいて，そんなことをいわせる。

そしてその夕方に東来順に行ったら，午後の男の人の他に別の男の人と女の人がいるんだ。そうしたら，おれが何年に化学工業について書いた，あんた農業も書いたねと何でも知ってるんだ。おれに最終的にいいたかったのはね，外務省から情報を取れと。アジア経済研究所は通産省だ，なら通産省から取れっていうんだ。対中国政策の動向を。どういう人間が，どのくらい中国との国交回復に積極的か。「おれ，そういう友人いないよ」っていったんだ。「ああ，これはおれ，狙われはじめたな」と察したね。そうしたら何ていったか。「ペイヤンパ」(peiyang ba)。

――「培養」ですか？

小島　育成しろというんだよ。ははあ，これは網に引っ掛けようとしている。それで冷静に考えたんですが，これが統一戦線なんです。

中国共産党革命が成功したのは，３つあるわね。まず軍事革命。それから解放区を作ったことと統一戦線を張ったこと。党員の中枢でない者を，右派であろうが何であろうがみんな抱き込んで，それぞれ利用できる程度に利用していくっていうのが彼らの方針。三反五反で追い出されたその先生を彼らが使っていたということが，1973年になって初めてわかった。

――だまされてた。

小島　うん。だまされていたというより，中国社会と共産党はそういうもんだと気がついた。ああ，もうちょっとこれは生の現実の政治の世界というのを勉強せんと，中国はお付き合いできないと思った。そんなきれいな社会じゃない。スメドレーとスノウが描いたイメージを勝手に頭に入れていた観念主義中国研究者だったっていうことに，ほんとうに気がついた。うん。

――ある意味でやっぱり現地体験が…。

小島　そういうことですね。うん。

今思うと不思議なんだけどね。うちの家内は大連生まれ，大連育ちなんですよ。1953年の引き揚げ者の最後の興安丸で帰ってきているんです。そのときにさきほどいった三反五反運動っていうやつね。これは朝鮮戦争で，中国が抗米援朝，北朝鮮を助けなければいけないといって，それを利用して国内に共産主義を浸透させたんです。ようするに平民というか，普通のブルーカラーの労働者が幹部を突き上げるんです。

家内のおやじは現在の大連化学工廠，昔の満州化学工業株式会社の大連工場長だった。技術者だから抑留されとったわけですね。共産党がやらせたと思うんだけど，日本人の旧社員に会社の上層部を批判させるんです。１週間，土間に座らされたっていうからね。「おまえは日本帝国主義の手先だ」と。日本人労働者によって組織されてね。大連の市当局はじーっと後ろでみていたらしいんだな。今は病気している家内のおふくろさんからよく話を聞いていたのは，そのときのすごさ。だからそのばあさんは80いくつになるけど，今でもおれが中国へ行くというと「あんな怖い国へ行っちゃいけない。危ない」というからね。しかし，おやじはね，彼が接触した大連市の共産党委員会の連中は「本当に清潔だった。あれはすごい集団だよ」っていつもいっとるがね。

おれが接触した中国経験者で大事な人がもう１人いるんだ。それは1964年に中国から帰った稗田憲太郎さん。これは満州医科大学，現在の瀋陽医学院の教授だった人だ。満州医科大学は，例の人体実験をやったとこ。終戦時近くには大学をやめていて，北京で敗戦を迎えた彼は，彼を慕った看護婦と医者たち20名くらいで太行山脈の解放区へ行って，山の中で肝臓の薬を作って治療したんです。彼は胡耀邦も治療したんだ。胡耀邦が総書記となり1983年に日本に来た時，稗田さんはもう亡くなってたんだけど，彼に感謝をしていた胡耀邦はその遺族にお会いになった。稗田さんには『アジア経済』でインタビューをしているよ(注16)。

稗田さんには東畑先生の縁で出会ったんです。

『日本経済新聞』に「交遊抄」ってあるでしょう。おれが医薬思想に関心があるといったら，東畑先生が「こういうのがあるぞ」といってその切り抜きをみせてくれた。内容は，稗田さんが，「王君と別れてから十何年たつが，いまだに私の網膜と脳みそから抜け切れない，消し切れない友人だ」と，そういう文章なんだ。そこで久留米医科大学に電話してお会いしたんです。

その王さんというのは，太行山脈の山のなかで稗田先生の面倒をみていた人なんだ。食事から洗濯から何から。これがほんとうに献身的だというんだ。稗田先生は，その王さんを通じてみた中国共産党の清廉さについて，何回もいうんです。文革について私が「単なる権力闘争ばかりじゃありません。幹部の腐敗も批判しています。それも原因なんです」っていったら，「あの共産党が腐敗するか」っていうんだ。「あれほど人民のために奉仕していて，腐敗するか」って。だから，家内のおやじの話とね，稗田先生の話っていうのは，やっぱりスメドレーとエドガー・スノウに描かれた，あの系譜なんだよな。

それにはまだ後日談があるんですよ。その王さんという人には，1989年3月に，おれが北京大学に講義に行ったときに連絡したの。彼から手紙が来て，フフホトの人民解放軍の病院長をやっているんだけど，北京に退職して引っ越すから電話してくれといわれてたんで。

そのときに王さんが来てさ，「おれのうちに行こう，行こう」って連れてくんや。で，トヨペットクラウンだよ。運ちゃんがいるわけ。「あれ？　これ，先生お1人の車ですか」ったら，「いや，違うよ。退職幹部3人で使っている」って。それで連れてってくれたのが豊台。日本軍に抵抗していた解放軍の最前線だったとこで，当時，周囲は農村でした。引退した高級幹部のアパートがたくさんあった。

それで，行ってみてびっくりしたの。6階建てぐらいのダーッとしたマンションがあって，その王さんの部屋へ入ったらね，5LDKだった。みたら女の人が赤子をおぶっているんだよ。「ああ，あれ，先生の娘さんですか」といったら，「いや，違う，違う」。子供は娘の子供なんだけど，おぶっているのは解放軍が雇った女中だっていうわけ。そこで，「こんないい生活をしていて，中国共産党は人民の味方ですか」っていったの。「こんなマンションに住める人，日本でもめったにありませんよ。共産党員って人民ですか」っていったら，王さん，（顔が）こんなクワッとなった。ああいうこといっちゃいかんね（笑）。あれはまずかった（笑）。

フフホトの人民解放軍の病院長っていうのは，省レベルの共産党委員会委員の資格なんですって。それでみんな待遇が決まっとるんだって。それからだね，ああ，これじゃあ既得利益層っていうのは固まってどうしようもないと思うようになった。

だからね，ものを読むよりも，そういう実体験が多いね。おれの中国の見方を決めてく転機というのは。昔の中国共産党員だった人とか，共産党員と接触のあった大人物との交流がね。

Ⅵ　研究の方向性の変化

――先生の場合，研究所の外で膨大なお仕事をされつつも，1960年代と1980年代には『アジア経済』で毎年のように堅い学術論文を書かれていました。それをよりかみ砕いた形で外部の仕事で展開されていたように思うのです。

小島　うん。一番いいものはみんな『アジア経済』で出すんですよ。

――その『アジア経済』に，1970年代はあまり書かれていないんです。1972年に「中国に見る自然の回復――大躍進前期までの山区建設を中心に――」（第13巻第1号）と「『北京週報』（1922年1月～1930年9月）と藤原鎌兄」（第13巻第12号）が載り，次に1980年に研究ノートの「大躍進期中国における農村改造計画」（第21巻第9号）が発表されます。

小島　分岐が出てくる？

――ええ，そんな感じがしますね。

小島　それはね，ひとつは歴史なんだ。さきほどパーキンスとの対話で，経済学を勉強してないことを痛感したってことを話したけれど，もうひとつ，おれの現在の欠陥は，歴史を知らんということですね。基本的な歴史をね。たとえばローマ史でも中国の経済史でもいいです。東畑先生がお訳しになったシュンペーターの本というのも，ものすごい経済史です。マルクスの『資本論』だって，経済史が非常にたくさん入っています。そういうのを大学のときに，あるいはアジ研の若いときに，徹底して1冊か2冊，何十回と読んで咀嚼するっていうことをやらなかったという思いがあったんです。何かそういうのをやろうとする気分があった。だから熊代（幸雄）先生の中国農法，6世紀の中国に残っている最古の農書ですがね，それの読書会をやったりしたんです。

それから1930年代，1940年代に中国におられて農業，農村問題でたくさんの著作を残された天野元之助という先生がいるのですが，その研究会をアジ研ではじめました。これは正式の研究会じゃないんですが。

――1980～1985年の「天野元之助著作研究会」ですね。

小島　ええ，そういうのを東京地区で食いっぱぐれているオーバードクターみたいな連中を集めて勉強会をやったりね。

それからもうひとつは，戴國煇さん。日本との関係で台湾を理解するというのは，それはやっぱり戴國煇さんの影響が非常にあった。戴國煇さんは，台湾の漢民族の，高砂族というか少数民族(注17)に対する原罪を感じていたね。中国大陸で共産党政権がやったのと同じようなことを，台湾の少数民族にやったらあかんという考え方があるんです。それで戴國煇さんと一緒に1930年におこった台湾の霧社事件研究をやったりね。

そういうふうに関心が分岐していったことは事実です。だから，アジ研で経済に関係するところを，もうちょっと深めていくというよりも，そちらへの分散が多くなった感じはするわな。

――それはなぜでしょう。

小島　いや，だからさきほどいったように，エドガー・スノウやスメドレーの描いた中国共産党は清潔で素晴らしい，全部正しいというようなことから外れていくことによってね，どこかにちゃんとした，社会や経済の動きを自分で判断するようなものを求めて歩いていたんでしょうね。思考の原点的なものを求めた放浪がはじ

まったんじゃないかな。

しかし，今に至っても，得ておりません。この年になってもね。そういう明確なものは。それはやっぱり古典をひとつ読み砕くという思考がなかったためでしょうね。これはアジ研にいると，不可能に近いかもしれない。

Ⅶ　研究所の社会での位置づけ

――1970年代～1980年代初頭にかけて，アジ研の外部でずいぶん，研究会をされています。さきほどの近代日中関係研究会で資料収集，戴國煇先生との霧社事件と少数民族，それから日中経済協会…。

小島　日中経済協会では，1982～1983年くらいからかな，農業委員会で20年間主査を任されました。毎年，農業の動向を書かなきゃいけなかった。

――外の仕事についてアジ研に特に何かいわれませんでしたか？

小島　いや，議論はありました。たとえば外で講演して5万円稼いだら，半分アジ研に入れたらどうかとかね。そんな議論があったけれど，結局，税制でできないんですよ。アジ研の所得にするのか，個人の所得にするのか。

結局ね，外でばっかり仕事をやって，なかでやらないっていう人は少ないですよ。なかでたくさん仕事した人ほど外で仕事していますよ。全体をみますとね。そういう合意がかなりできていてね，アジ研の宣伝にもなるというので，外の仕事をむしろ奨励するようになったですね。あれは萩原（宜之）理事（1977～1982年理事。のちに獨協大学に移る。2000年没）のときかな。

――いつ頃の話でしょうか。

小島　1970年代の終わりごろからかな，かなり無抵抗で外で仕事ができるようになるのは。

外でいろいろ発言したりものを書くということになると，それらしいことを書かにゃいかんじゃない。おれは4人も子供がいるからさ。1963年から5年間に4人も生まれてきてね。飯を食わせにゃいかんからね。この圧力は大きかった。おれが外でいろいろ仕事できたのは，このためですよ。だから，あんたね，2人ぐらいじゃあかんで。あと2人くらい作りなさい（笑）。もうちょっと論文たくさん書くようになるから。

――1970年代の『世界』をみますと，小島先生も含めて，アジ研の研究者がずいぶん論考を発表されています。年によってはほぼ毎月誰かが登場して，政府の対中政策とか対アジア政策に対してもコメントしている。当時，アジ研全体で，かなり意識して外で論考を発表しようとか，そういう雰囲気はあったのでしょうか。

小島　それはないですね。それは構造的なものですね。日本の現代中国研究は今，石川先生がご存命ですが，もし全員ご存命なら85歳から93歳ぐらいまでの人たちでひとつの山があるのです。石川滋先生，石川忠雄先生，村松祐次先生，思想のほうでは西順蔵先生とか，政治の衞藤瀋吉さんですね。それがひとつの世代のグループであったのです。

その次の世代というのが，実はアジ研なのです。それが昭和5年，6年生まれから，昭和9年，10年生まれで，アジ研に10人前後いたのです。その人たちがアジ研に入ったのが1960年前後～1967，1968年の間ですから，外からみるとそれがひとつの塊になるのです。我々も十数年たちますと1人前になるんですよね。それでジャーナリズムがアジ研に人を探しに来たというわけです。私が最初に『世界』に書いたのも1966年の文革のときですが(注18)，私の名前を知らなくてもアジ研に聞けば誰かいるだろうと来るわけですね。特に1960～1970年代は文革によってジャーナリズムが中国にずいぶん関心をもちはじめました。ようするに新しい世代の現代中国研究者が絶対的に少なかったんです。

それからもうひとつはね，これは小生がアジ研に残した唯一の功績ですが，今講座をやっているでしょう。

――夏期講座ですか。

小島　あれ，おれが作ったの。もっと成果を世のなかに還元せな悪いじゃないかって。

還元の方法は2つあって，アジ研にいて外部の方をお呼びしてお話しする。前のアジ研（新宿区市ヶ谷）の建物の別館9階ね，あそこは200名ぐらい入るから，夏期講座をやるって話をしたら，理事が「じゃ，おまえちょっと企画しろ」ということで，それではじまった。

もうひとつは，当時のJETROと一緒になってね，JETROは全国の県庁所在地に拠点がありますから，そこの経済同友会や商工会と一緒になって講演会を設けるのですね。

――地方講演会ですね。

小島　そう。地方での講演会は前からあったんですが，もうちょっと頻繁にしてはどうかと，当時の調査研究部長の萩原さんを通じて，いったことがあります。

初めはずいぶん，所員の抵抗があったんですよ。特に当時の調査研究部(注19)がね。「どうしてそういう余分な仕事を強要するのか」とね。

――では，みなさん渋々やったわけですね。

小島　初めは渋々でしたね。

――だいたいいつ頃ですか。

小島　1970年代後半じゃないかな。地方講演会というのがアジ研の存在をあちこちの人に知らせるようになるんです。それでおれはずいぶん訓練された。人前で話をすることを。

――夏期講座などをやって成果を還元しようというのは，どういうモチベーションがあったのですか。

小島　それはアジ研の維持ですよ。

――当初は多くの職員がそういうのに消極的だったなかで，小島さんはその辺に敏感だったというのは，どういうバックグラウンドがあったのでしょうか。

小島　あまり自分でもわからんけれどね。ただこのままでいいのかというね。たとえば『アジ

ア経済』っていう機関誌出しているでしょう。読者が何人いるだろうかって。一番ひどいのは読者3人っていうのです。本人と編集者と，それから抜き刷りを50部送って，そのうちの1人読む。そういう論文があるのですよ。それはやっぱりまずいのではないかとね。人と話をして，「ああ，そういうこともあったんですか」という対話ができて初めてこちらも伸びるわけですから。そういう考えはあったね，早いうちから。

おれたちの世代は，学問志向，大学志向のような人もおりましたよ。10人いた同世代の中国研究者のなかにもおりました。けれども，それはやっぱり少数でね。アジア経済研究所っていう立場はですね，唯我独尊的なことをやって，政府や財界や一般庶民にもあまり関心のないような研究課題をやっていいものじゃないだろうというのはありました。

――アジ研ができたばかりというのがあって，アピールしていかないと自分たちの組織が守られないという気分というのもあったんでしょうか。

小島　ええ，だって，当時アジ研っていうのはね，特に中国関係の研究者は全国的にみて，村八分にされていたんだから。1963年にアメリカのフォード財団が金を出して，日本の中国研究者を組織化するという動きがあったんですよ。その日本の窓口になったのが市古宙三先生なんですね。それに村松先生だとか衞藤瀋吉さんとか，アジア政経学会を作られた方々が関与しているわけ。これに対して現代中国学会みたいな，左翼的な，中国，中共のいうことをかなり代弁するような人たちが猛反対するわけです。アジ研のなかでも3人，猛反対しました。運動もしてましたね。明治大学かどこかで大会をやるんですね。それでさきほどの，アジ研は満鉄調査部の再来だという，そういう人たちがたくさんおりましてね。アジ研糾弾になるわけです。

それがもうひとつ現れたのは『旧植民地所在目録』(注20)。何冊もあるでしょう，アジ研の図書館がやった大事業。台湾総督府，朝鮮総督府，満州国，満鉄が出版した書物は，だいたい，戦争直後にアメリカがもってっちゃったんですけど，日本の図書館にも残部があるんです。で，どれが日本のどの図書館にあるかということを編纂した大変な仕事です。これに協力しないっていう機関が出てきました。中国研究所は協力しないね。東大の社会科学研究所，今，末廣（昭）君（1987年までアジ研に在籍）がいるところね，そこにも断られました。だからそれらの資料はのちに「補論」という形で入れております。そういう系譜があるんです。

東畑先生が所長のときに，成田の飛行場建設に対してものすごい反対運動をしていた人がアジ研のなかに1人いたのです。私が知っているのは1人だけですが，ほかにもいたかもしれない。これが当時問題になって，佐藤栄作首相がそれに関して東畑さんを呼びつけて…。

――首相が直接呼びつけたのですか。

小島　呼びつけた。それでやっぱり短気だね。東畑先生は「私にアジア経済研究所を任せていただけませんか，ご安心できませんか」って。佐藤栄作首相は「わかりました」。これで終わったの。片方はしょっちゅう行っているんだよ，三里塚へ。

――外からみるとアジ研の評価は…。

小島　政府の犬だという評価もあった。

――一方で，政府，自民党なんかからは，アジ研はアカだみたいな見方をされた。

小島　そうそう。実際にどこかの雑誌が特集したんだ。「アジ研はアカの巣窟だ」って。何ていう雑誌だったかな，あれは取っておけばよかったな。どこかに捨てちゃった。実態は両方あったんです。個人でいろいろ中国について発言するのは，その人の思想信条にかかわることだから別にチェックできないね。アジ研もいろいろな人がいたんだね。

――そのなかで，アジ研の実態とか成果をみせようと。

小島　そういうことです。それで批判をされることがあれば，批判を受けたらいいじゃないかと，そういう気分だったね。

Ⅷ　1980年代
――改革開放期を見通す――

――では，ようやくですが1980年代に入ります。1979年にアジ研で「中国新長期経済計画の基本問題」という研究会が立ちまして，ここで主査になられます。1970年代初頭に石川研究会が終わり，その後，先生は中国経済の全体的な分析をあまりされていなかったように思うのですが，1979年にそういう研究会を立てられた。それ以降，まさにアジ研の中国経済論のリーダーとして，中国経済の全体像を論じる研究会を立てられていったように思われます。これだけみますと先生に何か大きな変化があったのかなと思うのですけれど。

小島　それは大きな変化じゃなくて，アジ研の理事のほうから要請があったと思うのね。たぶん，通産省の要求があったと思うんです。1978年の12月に中国でものすごく大きな政策転換がありましたから，その後中国がどうなるか見通してくれという。それで年格好からいうと，しかも経済関係ということになると，おれだということになって，やったんじゃないかな。あまり熱心ではなかったですね。

――その研究会のメンバーをみると，中兼和津次さんとか，川村嘉夫，嶋倉民夫，山本裕美，徳田教之，田島俊雄，石原享一の各氏と，有力メンバーを総動員したという感じがします。

小島　けれどもあまり結果は出ていないんじゃなかったかな。それは主査が内発的にやろうっていうタイプのものではなかったから。それは石川先生のようにね，自分のモデルがあって，これで描いてみるっていうのとは違うんよ。

けれども今思うと，1978年12月の改革開放については，私の理解度は3割程度しかなかった感じですね。外国からお金が欲しくなったんだなと，単純にそのぐらいしかわかってなかった。当時，中国は大変困っていた。1960年代，1970年代に中国は軍事経済化したわけです。ミサイルや核開発に資源が動員されていてね。それぐらいは頭にあったです。それで耐えられなくなって，それまで遮断されていた外国から

お金と技術を入れるということです。改革開放の開放です。その点については大転換だなと思ったですよ。

あのときの論評のなかで一番よくいいあてていたのは渡辺利夫さんだね。彼はずばっといった。もし中国経済研究50年のエポック・メイキングをひとつ書けといったら，それを挙げたいと思う。あの人は韓国の高度成長メカニズムについて大変すぐれた研究をした人ですね。やはり輸出と外資の問題，あるいは外国技術の導入を核にして書いているわけですね。それはアジ研の韓国経済の研究者よりも明晰に書いてあるわけ。だから彼の頭のなかでは，韓国と台湾が一緒になるわけです。それを中国の改革開放の解釈に平行移動するわけだね。中国はやっとそこへ到達したか，これで発展するぞと。たしかにそうなったんだ。

そういう新しい大変革について瞬間的に反応するだけの能力は，私にはなかった。残念ながらね。

たとえば中嶋嶺雄さんみたいなね。あの人，文化大革命のときに，ずばっと「これは毛沢東革命だ」といったからね。あの人は政治学における権力の視点からそういった。おれは毛沢東の革命といわれてみてもわからなかった。最初は威勢のいい学生が騒いでいる程度くらいしか思わなかった。腐敗幹部も出てきたから，それを批判するぐらいだろうと。でも半年たって1967年に入ると混乱しはじめるからね。そうすると何の混乱かわからなくなって。結局，権力の属性について，おれが勉強していないからそういうことになる。これは理論の問題なんです。経済理論をあまり勉強しなかったことと，経済史の古典を熟読してないこと，それが生涯の研究のマイナス面だという気持ちがあります。だから見誤ってきたことが多いんだよ。いいあてたことは少ない。

改革開放についていいあてたことは，「消費の解放」ですね。そういう指摘をしたことがあるんだよ。それは日本で行われたある国際会議でね。緒方貞子さんや渡辺利夫さんも出ていたよ。消費の高まりが改革を駆動する主要な力になっているという考えは1970年代の末にはあった。それは『東京大学新聞』とかに書いた(注21)。改革開放がはじまってから3，4年してこれは「消費の解放」だ，これまで「贅沢は敵」だったが今は「贅沢は素敵」，「素」が入った，と書くようになったんだ(注22)。

――そのお考えが1986年の「中国の経済改革と開放政策」という論文(注23)に結実されたように思われます。毛沢東時代と鄧小平時代の違いについて，消費を抑えて強蓄積をする時代から，個々の人々の生活レベルの向上からそれを強制できなくなり，消費が改革を主導していく時代に入ったということをクリアに描かれています。

小島　そう，『アジア経済』のね。たしかあれで賞(注24)をもらった。上下で書いたやつね。（資料を探して）この絵（図）が発端なんです。自分で数字書いて，絵を描いてみたわけだな。うまく出てくるのよ，当時あまり資料がなかったんだけどね。

――食糧消費の推移の図ですか。

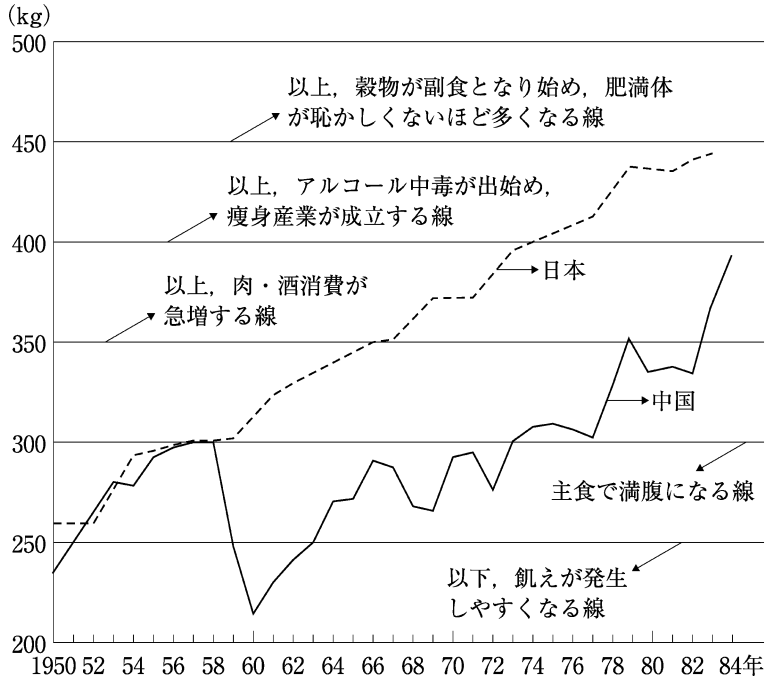
小島　そう。毛沢東は「もうたくさん」と発音しはじめたって書いたんですね。1970年代初

め，農村のほうはちょっと遅れるけれど，食糧で満腹しはじめて，ベトナム戦争の危機がなくなって社会の緊張が緩みはじめた。それで食糧が満腹になれば，ほかのものが欲しくなる。それだけ単純な話。この図（図１）ですね。

――これは私（大原）も学生の時にみましたが，目を開かれた気がしました。

小島　ようするに，もみがらつきの１人当たりみかけ穀物消費量が300キログラムの水準になると，あとはもうちょっといろんな食べ物，副食が欲しくなる。特に動物性タンパク質への需要が非常に増える。そのラインに1970年代に都市，農村とも大体到達している。この図を描いてみて，ああ，そうだ，と気がついた。そうなると衣料の需要も同じことです。いつごろからボロがなくなるとか，ファッション産業が出てくるだとか。この図(注25)は住宅の建築量ですが，都市の新規の建築量が，1957年を100とすると，1960年代にその半分くらいになっているでしょう。住宅の図を作っていて，核ミサイルを作っているうちに住宅建設が半減していたことがわかったんです。これはひどかったん

図１　主食の年間１人当り量



（出所）小島麗逸「中国の経済改革と開放政策（Ⅰ）」『アジア経済』第27巻第7号　1986年　5ページの第3図。
（原出所）日本：1975年までは農林大臣官房調査室編『食料需要に関する基礎統計』農林統計協会 1976年，76年以後は，農林省『農林省統計表』各年版より作成。
中国：国家統計局編『中国統計年鑑』北京　中国統計出版社（各年版）。
（原注）(1)　中国の食糧概念に合わせて統一した。中国は穀物，大豆，サツマイモ（５分の１に換算）を食糧としている。
(2)　日本の玄米，玄麦換算でなく，籾付き換算である。
(3)　次の公式で算出。（生産量＋輸入量－輸出量）÷人口。

だなと気づいた。だから文化大革命のときに下放をやったわけです。

――では，食糧に関する図を一番最初に作られた。

小島　そうです。それはやっぱり農業をやっていたから，そういう発想が出てきたんでしょうね。

――この消費の解放という見方は，ぱっとひらめいた感じなのですか。それとも，いろいろ数字をいじってみると，ああこれかなという感じで出てきたのですか。

小島　そうそう。いじってみてね，そうかなあと。

だから，私はコンピュータで図を作ることをやらない。こうやって集めた数字を手で書いているうちに，やっと意味がみつかるの。何回か消したり書いたりしているうちに。

Ⅸ　東畑先生

――先生は中国の経済統計の解説(注26)で貢献されていますし，ご著書でも膨大な統計データをいつも整理されています。そういう統計に対する厳格さ，徹底した収集というのは，どこで身についたのでしょうか。

小島　それは先にお話しした石川先生のシュアな統計操作の方法の影響でしょう。全然資料がないのに，いきなり化学工業をやれと。

――たしかにそういわれれば納得するのですが，しかし，もう少しご自身が本来もっている，ある種データや数字に対するかなりマニアックなものがあるのではないかと…。

小島　それはあまりないですね。

――何か先生の別の回想記で，1950年代に「八頭身美人」というのが日本で非常に話題になったときに，じゃあというので自分のお母さんを測ってみたと書かれていました。どうも，研究者になる前からあちこちを自分で測っておられたようです。

小島　お袋は六頭身だったよ。その話は，東畑先生との雑談で出てきたんや。

東畑先生から私が受けた影響はねえ（笑）。アジ研にいるとたまに電話がかかってくるわけよ。「おまえ，時間あるか」「あります」「所長室こいや」というわけ。そうするとだいたい，女性の話をするわけ。もう亡くなったからいいと思うけど（笑）。あの人もスケベで，いろいろな話をするのが好きな人だからな。そうしているうちに，なかに珠玉のような言葉がでてくるのです。

そのひとつが「おかちめんこ」。日本の女性のおかちめんこです。あれは1961年だな，私が香港に派遣されて行ったばかりの頃です。あの人は吉田首相の第何次内閣か知らないけど，農林大臣を頼まれたこともある人で，池田元首相にも近い人です。ある時，池田さんに頼まれて先生がパキスタンまで行かれて，日本に帰られる時に香港に寄られたんです。その時，外務省のお付きの人がね，「東畑先生にはびっくりしました」とおれにいうんだ。アフガニスタンの農林大臣に会ったとき，向こうに「日本は明

治以後，農業，農村をどうやって発展させてきたのですか？」と聞かれて，先生は「Japanese agriculture is not husbandry, but “wifery”」と答えたというの。「husbandry」というのは農業という意味ですね。中国語の漢字の「男」，田んぼに力と書く，あれと同じ意味です。けれども「wifery」だというの。

「それはどういうことですか」と向こうの農林大臣が聞いたら，こう答えたというの。「日本の明治以後の農業，農村の柱は婦人だ」って。家族の誰よりも早く起きて，誰よりも遅く寝てね，家事をやり，だんなと同じように農田に出て働いた。だから農村婦人がいなければ日本の農業は発展しなかったと説明したんだと，外務省の人がおれにいうんだ。

その話を聞いていて，東畑さんに会ったらな，伊東絹子(注27)の話になった。「あれはな，飯がよくなったばかりじゃないぞ。草取りだ」。草取りというのは，田んぼを手でかき分けてやるんだ。おれなんか子供のころさんざんやらされていた。3回くらいやらなくてはいけない。「草取りやっていたら，それは君，おかちめんこになるよ」。三番取りなんていうのは稲の葉が目を突くからね。「そういう労働をやっていた日本の婦人のなかから，世界の美人コンテストで伊東絹子のようなのが出てくるというのは，日本がそういう社会から離脱していることを示すんだ」と，こう話をされる。「うーん，これはおもしろい」と。風俗と経済の関係ね。あの先生はすごいこというと思ったね。だべっていると，そういうことが出てくるの。あの先生は。

――東畑先生に，影響を受けたというところは，そういう…。

小島　雑談のなか。所長だから自制されていたとは思うんですが，しょっちゅう呼ばれるの。1965年とか1967年とか，アジ研に入ってすぐのヒラのとき。

――よく「東畑イズム」というと，アジ研の人は「現地主義」というのが頭に浮かぶようになっているのですが，現地主義といわれて何かピンとこられることはありますか。

小島　それは今いったようなことが，中国農業の将来をみる目になっていたりするわけですよ。

たとえば大躍進の失敗についてもね，先生が「乾燥地域にあんなに水入れていいのかねえ」っていうんです。2次アルカリ化の問題ですね。上から水をやると下がってくるでしょう。そうすると，砂漠でも地中に水分があって，それと結びつくから毛細管現象で引き上げられてくるわけだ。それはおれもその話の後で調べたんだけどさ。パキスタンでもインドでも，中央アジアでも，水を入れすぎると2次アルカリ化が起こっていたんです。中国の大躍進の失敗は，それもひとつの原因になっていたのです。

――つまり現地主義といっても，現地の飯を食って，空気を吸ってわかる問題というよりも，どちらかというと…。

小島　それはそうですよ。それはやはり蓄積された分析能力というのかな，常識というか，そういう知識をいつも勉強しておかなきゃならないということなんだけど，そのヒントとかポイントとかが，彼とのダベリングの間で，ちょこっ，ちょこっと出てくるの。それが大きかっ

たね。

X　海外での活躍

小島　東畑先生にはニーダムも紹介してもらいました。さっきの稗田先生の話を東畑先生としてた時ね，西洋医学と東洋医学の違い，それからギリシアのヒポクラテスの話になって，ジョセフ・ニーダムの話になったの。ニーダムは17世紀までの中国の科学技術を研究していたでしょう。先生はニーダムとも親しかった。私はニーダムの名前を東畑先生から伺って，ケンブリッジ大学まで行ってお会いしてきた。それから彼と親しくなったのです。1971年かな。ロンドンで会議があったのでそのついでに彼を訪ねたの。このニーダム先生が，東畑先生によく似ているの。

当時，中国は資料を外国の学者に開放していないから，先生は日本に資料をみに来るわけ。日本には大量の中国の古典が入っているだろうということでね。彼が日本に来ると電話がかかってきて，何回もお会いしたな。相手は大先生だけど来客だから，たまにはおれがおごらなければいかんと思ってね，銀座のてんぷら屋で，なけなしの金で，高いてんぷらをごちそうしたよ。「てんぷら？　これはどこの料理や」というのね。「いやこれは日本じゃないんですよ。ポルトガルから来たものなんですよ」という話をしたら，「じゃあ，ポルトガルからどうして来たんや」という話になる。ようするに日本への食の伝播をおれに聞くわけよ。困っちゃったよ。

そのうちに，彼がほんとうに啓示的なことをいったの。「世界に道は2種類しかない」って。「え，何の道ですか」というと「ひとつはローマの道だ。これはラウンド・アバウトがある」と。

――ラウンド・アバウトですか。

小島　ようするにロータリーよ。2本の道が直行するときにまんなかにロータリーがある。もう1種類の道というのは，やはり軍事道路として発展するんだが，長安を中心とした道。これは直行している。「みろよ，京都の道はみんな直行だろ。どこにロータリーがある？」。いわれてみればそうや。

またおもしろいことをいうんだ。もし超超超高速度カメラがあって，人工衛星があの当時打ち上げられてたら，世界を上からみて，長安から直行式の道路が延びていき，ローマのほうからはロータリー式が伸びてくる。それを写せるというんだ。

おれはそれから，道路，交通問題に関心をもちはじめた。調べてみるとインドにラウンド・アバウトがある。他のアジアにもあった。台湾にあったんや。台北と高雄に。あそこを造った人は後藤新平だからね。後藤新平はドイツに留学していたからね。それから中国の東北，旧満州ね。これは帝政ロシアが造った。帝政ロシアが道路をフランス経由でローマから学んで，それがシベリアを通って旧満州に来たんだ。

――ニーダムとの出会いの後で，インドで留め置かれたというお話を以前，伺ったことがありますが…。

小島　それはマハラノビス先生。これは世界的

な統計学者ですよね。インドの第2次5カ年計画の立案者です。これもまた石川先生と結びつく。

マハラノビスに最初に会ったのはその前の年の秋ですよ。国際文化会館から私に電話があってね，マハラノビスという学者が来ているんだけど，中国のことをいろいろ聞きたいといっているので，あんた時間空けてくれと，いきなり電話が来たの。おれはマハラノビスがどんな人か知らないまま国際文化会館に行ったわけ。あの人はネルーの片腕だった人だ。夕方に行って話をするうちに，明日朝9時の飛行機に乗るっていうのに，延々と夜の11時ごろまで話した。「あんたの話はBrilliantだ」といって。翌日の帰国をキャンセルして「もう1日ミスター・コジマの話を聞く」となったのよ。次の日も朝から晩まで。そして「おまえ私のとこへ来ないか」というの。

――インドにですか。

小島　インドに。おれは，あのときはよほど行きたいと思った。「じゃあ，先生，牛と牛のくその研究させてくれますか」(笑)。「ああ，何でもいい。おまえは中国について理解をしていることをみんなおれに話してくれ」と。おれは頭抱えちゃった。当時，中国は文革に入っていて日本とは敵対関係だった。アジア経済研究所は日本政府のシンクタンクだと中国は理解している。中国側にもしそれがわかったら，これは政治問題になるかもしれない。だからその時はお断りしたね。でも「実は来年の2月か3月に，イギリスで会議が予定されています。そのときに帰りにお寄りしますから」といった。「それじゃ，期待して待っている」と。

それでロンドンからカルカッタに飛んで行ったんだ。彼の私邸がカルカッタにあるから。3人ぐらい頑強な青年が迎えに来て，彼の私邸へ連れて行ったの。そうしたら彼の奥さんが出てきて「マハラノビスはネルーに呼ばれてニューデリーに行っています。一晩泊まってから，もう1回ニューデリーに戻ってくれ」というの。ニューデリーに着いてから1週間の缶詰。朝9時から夜の9時まで。昼寝を彼は2時間していて，そこだけ空くわけ。「この間に自動車でどこでも行ってもいいよ」という。

彼が「質問するから，知ってることを答えてくれ」という。それで政治経済の話，人的関係を含めて，おれの知っている話をいろいろしゃべりましたよ。おれは英語が十分でないから，彼は確実に要点を聞き出そうと問い直してくる。それで昼飯も一緒，夜食も一緒，朝だけは別でしたけれどね。それが1週間続いた。それで帰るときに「ほんとうにもう1回，ドクター・トーハタに手紙を書くから，あんたに来てほしい」といわれたけど，「いや，いろいろな事情があって無理なのです」と断って帰ってきたの。今思っても，インドに1年滞在しなかったのは非常に残念だった。

そうしたら5月に，カトマンズでインドの首相と郭沫若が会ったという小さな記事が『日本経済新聞』に出た。ああ，これは文革で断交に近い状態であったのを，インドが一所懸命，水面下でアプローチしているのだとわかった。彼は盛んに「日本の友好団体とか中国に行く人たちはどうやって行っているか」と聞いていたもんな。ああ，あのことかと思ったね。

――先生がマハラノビスに１週間話した内容というのは，どういうものだったのですか。

小島　生活状況や計画の立案の方法や，投資がどれぐらいかとか。話の過程で感銘したのはね，日本が中国の東北地方に残した資産ね，今の鞍山製鉄所とかです。それらが中国の重工業の基礎になっているという話をしたときに，「どれぐらい資産があるんだ」とずばっと聞いてくるわけだ。日本の敗戦時に賠償使節団として来たポーレー（Edwin W. Pauley）がトルーマンに提出したレポートに，当時の金額でほぼ20億ドル分をスターリンが持ち去ったとあると紹介したんだ。「もしそれがあれば」とマハラノビスがすぐいうの。「20億ドルの固定資産があったら，かなりのものだったなあ」，「それが中国に残っていれば，インドよりもこれぐらい発展が早かっただろうな」と，そういう言い方をしていたのです。それが非常に印象的だったですね。

私はそういう人から影響というのかね，目を開かれたことがいくつもある。何回もありますよ。

――海外でご活躍されたことといえば，世界銀行に中国の都市化の問題の調査で呼ばれたそうですね。

小島　そうそう，あれはアジ研の編集部の斉藤（幸男）さんに助けられているの。*Urbanization and Urban Problems in China* という本(注28)をアジ研が出してくれたでしょう。あれがどうも中国の都市化問題で，英文では世界でも最初らしいんだ。それが世銀の中国担当者の目に入った。それで私にも誘いがあって調査メンバーに入ったんです。このプロジェクトは中国の発展改革委員会から世銀に，中小都市の発展の可能性があるか否か，国際的経験から回答を出してほしいという要請があり，世銀が組織した調査団です。アメリカからも何人か来ていましたね。おもに地理学者が多かったです。カナダとフランスから１人ずつ，そして小生をあわせて全部で７人。それから中国人が４人。みんな外国留学の経験があって英語の書ける連中でした。発展改革委員会の連中がいつも一緒でした。それが2002年からはじまりました。準備に１年，ついで2003，2004，2005年と，ほぼ３年半ぐらいかかったですね。

でも，やはり苦しみました。朝から晩まで英語で。プリ・サーベイが１カ月続くんですよ。あれはフラストレーションがたまるね。あれはアンハッピーだった。

Ⅺ　アジ研を離れて

――先生は1987年にアジ研を退職され，大東文化大学に移られます。その後，1980年代後半～1990年代後半，アジ研では多くの研究会の主査としてかかわられました。そこでは環境，都市化，都市の貧困といった中国の新しい問題を取り上げられました。

小島　当時としてはね。

――ちょうどそれらの分野について社会的関心が高まりつつあった時に，先生はすでに成果を発表されていて，社会の期待に応えられた。中国の都市化の英文専門書もそうでした。そうい

う新しい視点，発想はどこから得られたのでしょうか。

小島　それは，先にもいいましたけど(注29)，おれの給料では買える家がなかったことです。高尾まで探したけれど家が買えない。どうしてこんな地価の上昇が起こるのか。そういうことを体感していたから，中国でも高度成長になれば当然同じことが発生すると。

――環境も同じように。

小島　同じです。やはり消費，生産量が多くなれば必ず問題がでます。それは前にトイレの研究をしていたのが原点にあるわけです。

それに影響を与えてくれた人もいます。特に家内のおやじが化学技術者で環境問題についてもしょっちゅうだべっていましたから。そういう基本的な考えをひょいひょいと私に与えてくれた，明治生まれの偉い人が何人かいたのです。それが大きいんじゃないかな。私の研究がもし若干でも人よりも早くそれらに着目したということがあればね。

――日本の近代化というか，高度成長の最中で実際に体感されたことを…。

小島　そうそう，個人的な体験を通してね。研究の出発点が，そういうところであっていいかというのは，いろいろ議論があるでしょうね。少なくとも，小生はある理論を学んだとか，ある歴史家のエッセンスからというのは主ではなかったですね。それがまた結果になっていますがね。もうちょっと即物的だった。

Ⅻ　アジ研へメッセージ

――大変長時間おつきあいいただきましたが，最後にアジ研に対する評価とサジェスチョンをいただきたいと思います。

小島　やはり大風呂敷を広げられる人が，若い人の間で出てくるといいなと思うね。大風呂敷をね。その大風呂敷っていうのは，途方もない大風呂敷であればあるだけ，将来的に何かを生み出す力が大きくなってくるんじゃないのかなあ。小さな問題だけに埋没していくよりも，そのほうがいいと思う。それには，やはり歴史を，どの分野でもいいのですがひとつか２つ，徹底的に読みこなしていく。それから違う分野の人との接触だろうなあ。

――違うディシプリンということでしょうか？

小島　ディシプリンというか，たとえば理工系の人でもいいし，医者でもいいし何でもいいんですがね。あるいは市井のおばさんたちでもいいのです。案外そのなかに，ひょいっとね，こちらが欠落していたような視点が出てくる可能性はありますね。

――アジ研に期待できることというのは。

小島　それは外からみると，やはり大変な頭脳集団ですね。それからもうひとつは，インターネットの時代になってどう評価するかは別なのですが，やはり資料の蓄積はものすごいです。頭脳の蓄積はたしかにあるのです。

もし弱いところがあるとすれば，統合力でしょうね。統合力というのは，やはり具体的な研究会の主査の能力によります。あることを論証するために5人くらい集めて，それをものすごい力で最後まで引っ張って行く。そういう人たちが，どれぐらい出てくるかによって，決まってくるんじゃないかな。

（注1）吉田茂『日本を決定した百年』日本経済新聞社　1967年。

（注2）S.アドラー『中国の経済』（本橋渥訳）岩波書店　1958年（Solomon Adler, *The Chinese Economy*. New York: Monthly Review Press, 1957）。

（注3）A.スメドレー『偉大なる道――朱徳の生涯とその時代――』（上）（下）（安部知二訳）岩波書店　1955年。当時の英米の政治情勢により英語版の出版は日本語版に遅れた（英語版 Agnes Smedley, *The Great Road: The Life and Times of Chu Teh*. New York: Monthly Review Press, 1956）。

（注4）E.スノウ『中国の赤い星』（宇佐美誠次郎訳）筑摩書房　1952年（Edgar Snow, *Red Star Over China*. London: Gollancz, 1952）。

（注5）アジア経済研究所は1958年12月26日にまず財団法人として設立登記。1960年2月に「アジア経済研究所法案」の閣議決定，衆参議院での可決を経て，同年7月1日に特殊法人として設立登記された。

（注6）のちにハーバード大学経済学部長に就いたアメリカを代表する中国経済研究者。

（注7）中華人民共和国国旗。

（注8）中華民国国旗。「青天白日満地紅旗」。

（注9）「中国経済の長期展望プロジェクト」は石川主査のもと1963年にスタートし1969年に終了した。『中国経済の長期展望』シリーズがⅠ～Ⅳまで編まれ，Ⅰが1965年，Ⅱが1966年，Ⅲが1967年，Ⅳが1971年に出版された。

（注10）石川滋『中国における資本蓄積機構』岩波書店　1960年。

（注11）山梨県大月市の山村。「はしがき」参照。

（注12）小島麗逸『中国の経済と技術』勁草書房　1975年。

（注13）1951～1952年に展開された，官僚および資本家・私営企業の不良態度・行為（前者の汚職，浪費，官僚主義および後者の賄賂，脱税，資材の横領，手抜・ごまかし，国家経済情報の盗窃）に打撃を加えようとした政治運動。官僚と資本家を萎縮させ，その後の急速な社会主義化の基礎になったという。

（注14）1901年に日中の連携強化を担う人材を輩出することを目的として上海に設立された日本の高等教育機関。外務省の直接の支援を得，1939年に東亜同文書院大学となった。1945年閉校。帰国したこの学校の教職員が中心になって1946年に愛知大学が設立された。

（注15）フランスは1964年1月27日に中国承認を発表。

（注16）稗田憲太郎「中国における医学をめぐって――八路軍に医学を教え，八路軍に学んだ記録――」『アジア経済』第11巻第9号　アジア経済研究所　1970年　2～25ページ。聞き手は加藤祐三，小島麗逸。同氏には『医学思想の貧困――病理学者の苦闘――』（社会思想社1971年）がある。

（注17）現在，台湾では「原住民」および「原住民族」と呼んでいる。

（注18）「『自律的民族経済』の建設」『世界』第252号　1966年。

（注19）現在の地域研究センターの前身のひとつ。

（注20）アジア経済研究所図書資料部編『旧植民地関係機関刊行物総合目録』（全5冊「台湾編」，「朝鮮編」，「満州国・関東州編」，「南満州鉄道株式会社編」，「満州国・関東州・南満州鉄道株式会社編　索引編」）アジア経済研究所1973～1981年。

（注21）「中国――バターも大砲も，そして――」『東京大学新聞』　1979年2月12日。

（注22）たとえば以下論文。小島麗逸 「脱皮」『アジ研ニュース』アジア経済研究所　第56号（第6巻第4号） 1985年　1ページ。小島麗逸「経済改革と『五花八門』」『アジ研ニュース』アジア経済研究所　第56号（第6巻第4号）1985年　6～7ページ。

（注23）小島麗逸「中国の経済改革と開放政策（Ⅰ）」『アジア経済』第27巻第7号　1986年2～26ページ。小島麗逸「中国の経済改革と開放政策（Ⅱ）」『アジア経済』第27巻第8号　1986年　74～95ページ。

（注24）アジア経済研究所主催「発展途上国研究奨励賞」（第8回，1987年）。

（注25）小島麗逸「中国の経済改革と開放政策（Ⅰ）」『アジア経済』第27巻第7号　1986年10ページの第8図。

（注26）小島麗逸編『中国経済統計・経済法解説』アジア経済研究所　1989年。

（注27）1953年のミスユニバース世界大会で日本人として初めて第3位入賞。

（注28）Reeitsu Kojima, *Urbanization and Urban Problems in China*. Occasional Paper Series. Tokyo: Institute of Developing Economies, 1987.

（注29）「はしがき」参照。